



YOKOHAMA F.M.A.R.

FOOTBALL

- 2022 Season Results
- 新型コロナウイルス感染症への対応総括
- フットボールビジョンの進捗

2022 Season Results

明治安田生命 J1リーグ



	勝点
1 横浜F・マリノス	〈68〉
2 川崎フロンターレ	〈66〉
3 サンフレッチェ広島	〈55〉
4 鹿島アントラーズ	〈52〉
5 セレッソ大阪	〈51〉
6 FC東京	〈49〉
7 柏レイソル	〈47〉
8 名古屋グランパス	〈46〉
9 浦和レッズ	〈45〉
10 北海道コンサドーレ札幌	〈45〉
11 サガン鳥栖	〈42〉
12 湘南ベルマーレ	〈41〉
13 ヴィッセル神戸	〈40〉
14 アビスパ福岡	〈38〉
15 ガンバ大阪	〈37〉
16 京都サンガF.C.	〈36〉
17 清水エスパルス	〈33〉
18 ジュビロ磐田	〈30〉



MVP 2022
最優秀選手賞
岩田 智輝
(横浜F・マリノス)

依然としてコロナ禍が続く中、前年の20から18にチーム数を戻して行われた。終盤戦は3年ぶりの優勝を目指す横浜F・マリノスを、3連覇が懸かる川崎フロンターレが追う展開に。優勝決定は最終節にもつれ込み、両者が共に勝利したため、横浜FMが勝点2差を守って4度目のタイトル獲得。1試合平均得点が2点以上という攻撃的サッカーで栄冠に輝いた。

明治安田生命 J2リーグ



	勝点
1 アルビレックス新潟	〈84〉
2 横浜FC	〈80〉
3 ファジアーノ岡山	〈72〉
4 ロアッソ熊本	〈67〉
5 大分トリニータ	〈66〉
6 モンテディオ山形	〈64〉
7 ベガルタ仙台	〈63〉
8 徳島ヴォルティス	〈62〉
9 東京ヴェルディ	〈61〉
10 ジェフユナイテッド千葉	〈61〉
11 V・ファーレン長崎	〈56〉
12 ブラウブリッツ秋田	〈56〉
13 水戸ホーリーホック	〈54〉
14 ツエーゲン金沢	〈52〉
15 FC町田ゼルビア	〈51〉
16 レノファ山口FC	〈50〉
17 栃木SC	〈49〉
18 ヴァンフォーレ甲府	〈48〉
19 大宮アルディージャ	〈43〉
20 ザスパクサツ群馬	〈42〉
21 FC琉球	〈37〉
22 いわてグルージャ盛岡	〈34〉

アルビレックス新潟が19年ぶりに優勝を果たし、6年ぶりのJ1昇格を成し遂げた。第40節で自動昇格を決めた新潟に続き、翌節にもう一つの枠を確保したのが2位の横浜FC。3年ぶりの開催となったJ1参入プレーオフは、決定戦に勝ち進んだ4位のロアッソ熊本がJ1で16位の京都サンガF.C.と1-1で引き分けたものの、規定により初の昇格とはならなかった。

2022 Season Results

明治安田生命 J3リーグ



2022 Season Results

FUJIFILM SUPER CUP 2022

2月12日(土) 日産スタジアム



J2昇格		勝点	
1	いわきFC	<76>	
2	藤枝MYFC	<67>	
3	鹿児島ユナイテッドFC	<66>	
4	松本山雅FC	<66>	
5	FC今治	<60>	
6	カターレ富山	<60>	
7	愛媛FC	<52>	
8	AC長野パルセイロ	<52>	
9	テゲバジャーロ宮崎	<46>	
10	ヴァンラーレ八戸	<43>	
11	福島ユナイテッドFC	<42>	
12	ガイナーレ鳥取	<41>	
13	ギラヴァンツ北九州	<40>	
14	FC岐阜	<37>	
15	アスクラロ沼津	<31>	
16	Y.S.C.C.横浜	<28>	
17	カマタマーレ讃岐	<27>	
18	SC相模原	<25>	

日本フットボールリーグ（JFL）から昇格したばかりのいわきFCが、その最初のシーズンを優勝で飾り、J2への昇格も果たした。序盤から上位をキープして第19節から首位の座を譲ることなく、第32節でタイトル獲得と昇格が確定。もう一つの昇格枠は最終の第34節に、鹿児島ユナイテッドFCと松本山雅FCとの競り合いを制した藤枝MYFCが手中にした。

2021 明治安田生命 J1リーグチャンピオン

天皇杯JFA第101回
全日本サッカー選手権大会優勝

川崎フロンターレ 0-2 浦和レッズ

今シーズンからスーパーカップパートナーの社名変更に伴い、FUJIFILM SUPER CUPと名称を変えたJリーグシーズンの幕開けを告げる一戦。2021シーズンのJリーグ王者である川崎フロンターレと天皇杯JFA第101回全日本サッカー選手権大会覇者の浦和レッズが日産スタジアムで対決し、浦和が2-0と勝利した。浦和にとっては16年ぶりのスーパーカップ獲得となった。

2022 Season Results

JリーグYBCルヴァンカップ



決勝
セレッソ大阪 1-2 サンフレッチェ広島

30回目の開催という節目となった2022JリーグYBCルヴァンカップは、国立競技場が舞台の決勝に5年ぶり2度目の優勝を狙うセレッソ大阪と、初優勝を目指すサンフレッチェ広島が進出。試合は後半にC大阪が先制するも、広島がアディショナルタイムに2点を奪う劇的な2-1の逆転勝利を収め、カップを持ち帰った。C大阪は前年に続く準優勝に終わった。

2022 Season Results

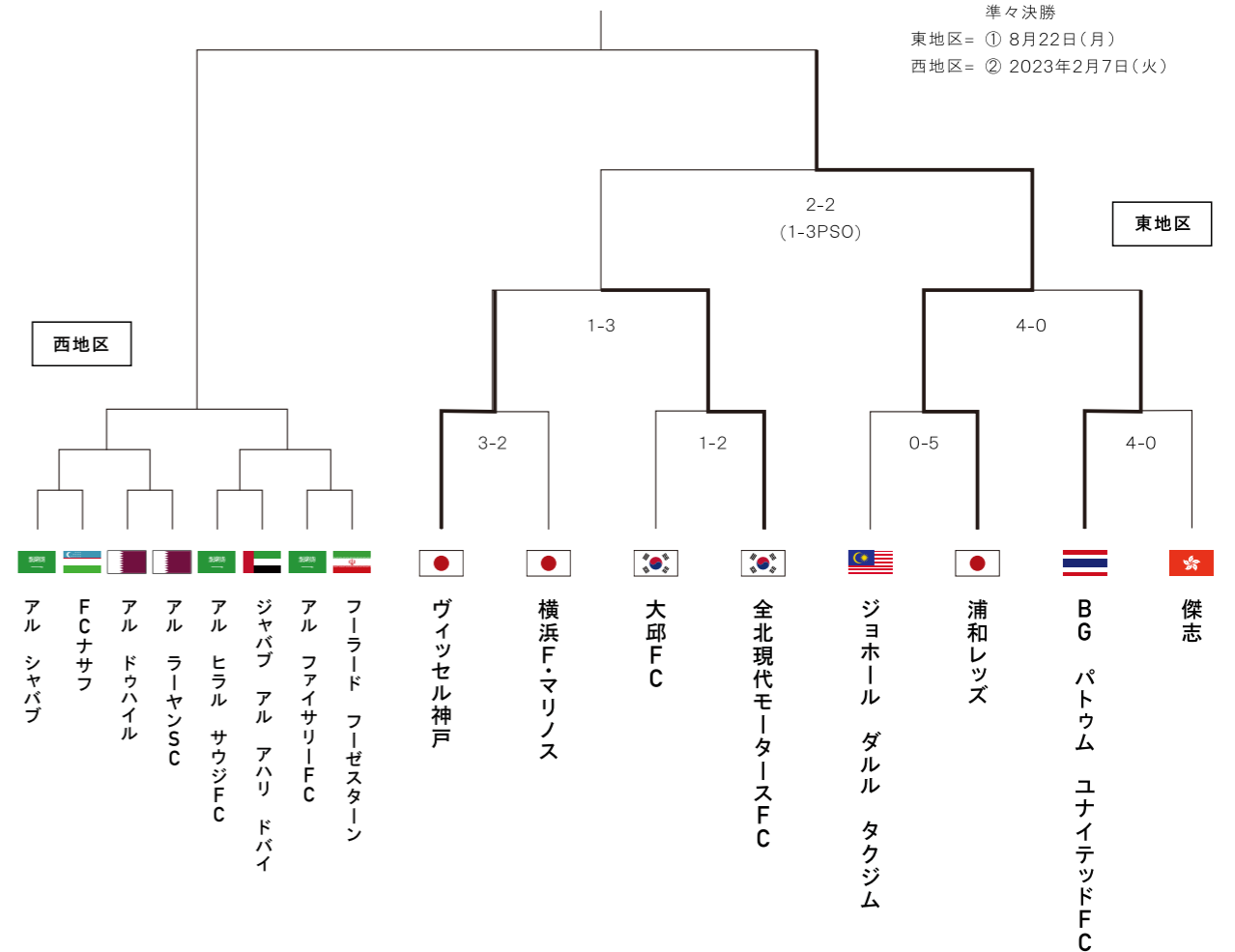
AFCチャンピオンズリーグ 2022

ノックアウトステージ

決勝
① 2023年4月29日(土・祝)
② 2023年5月6日(日)

準決勝
東地区= ① 8月25日(木)
西地区= ② 2023年2月10日(金)

準々決勝
東地区= ① 8月22日(月)
西地区= ② 2023年2月7日(火)



日本からは4クラブが参加、浦和レッズ、横浜F・マリノス、ヴィッセル神戸がグループステージを突破し、川崎フロンターレが惜しくも敗退した。東地区のラウンド16から準決勝はさいたま市で開催された。準決勝へ勝ち進んだ浦和が全北現代モータース(韓国)を延長戦、PK戦の末に退け、2023年4月~5月に開催が予定される西地区勝者との決勝に駒を進めた。

新型コロナウイルス感染症への対応総括 — コロナ対策編 —

基本方針ごとの3シーズンのコロナ対策の総括

2020年にコロナ対策における3つの基本方針を定め、段階的に正常化に向けた対策を行った。

▶ 健康を守りながら安全に再開する

リーグ安定開催の実現	日程や大会方式を一部見直しながら、 3シーズンで40都道府県で3,373試合 を開催。 2021シーズン、2022シーズンは予定試合数100% を開催。 (未開催試合は2020年の1試合にとどまる)
選手・スタッフによる感染拡大の抑制	Jクラブトップチーム選手・スタッフ全体の陽性者数は流行の波に沿ってシーズン合計件数は増えているが、国内全体の陽性者数に対して 半分程度の増加傾向に抑え、ある程度の感染を制御 しながら活動を継続
大会方式の見直し、ガイドラインによる共通ルールの設定	コロナ禍の不開催リスクを最小化するため、昇降格の一時中止や交代枠増など大会方式、競技ルールを一部見直し、チーム活動、大会運営、来場者向けのガイドラインを整備 68回の対策連絡会議と、そこで得た知見に基づく計71回のガイドライン改定 、都度の情報開示を通じ、最新のコロナ対策を反映させながら開催
費用対効果を改善した検査体制	費用対効果や利便性を改善 しながら検査体制を最適化

▶ お客さまをお迎えし、スポーツ文化を守る

こだわった有観客試合	再開後約2週間の無観客試合（リモートマッチ）を経て最短で有観客試合に移行。段階的な来場制限の緩和方針に基づきスタジアムからの クラスターの発生なく3シーズンでのべ1,667万3,419名 が来場 2022シーズンの総入場者数は2019シーズン比で 73%まで回復 J1平均入場者数はコロナ禍で初めて 10,000人を超えた
------------	--

▶ スポーツエンターテインメントとしての体験価値を高める

声出し応援の再開	2022シーズン後半から積極的な科学的検証に基づく運営検証を経て段階的に声出し応援を再開。 マスク着用や席間隔の対策が依然必要であるものの 9割のクラブ（58クラブ中52クラブ） 計246試合で声出し応援エリアが設けられた 一方で 1割のクラブが来場制限の影響で声出し応援エリアを設置できず 、また終盤の好カードの試合での声出し応援エリアの設置ができなかった試合も
----------	--

▶ 2023シーズンに向けて

- 本格的な正常化と流行期における開催リスクを両立させるメリハリのある対策
- 検査費用を中心としたさらなる費用対効果を実現するコロナ対策
- スタジアムの熱量を取り戻すための、声出し応援と満員のスタジアムの両立

シーズン		2020	2021	2022	20~22計
陽性者数(人)	(参考)国内 (厚労省発表)	235,907	1,497,520 [前年比 6.34倍]	22,064,759 [前年比 14.7倍]	23,798,186
	Jリーグ	65 [国内陽性者比 0.027%] [うち公式検査経由の陽性診断: 10]	172 [国内陽性者比 0.014%] [前年比 2.64倍] [うち公式検査経由の陽性診断: 41]	1,499 [国内陽性者比 0.006%] [前年比 8.7倍] [うち定期検査で陽性判定: 392]	1,736
公式試合数(試合)		開催試合数: 1,103 無観客試合: 61 有観客試合: 1,042	開催試合数: 1,122 無観客試合: 25 有観客試合: 1,097	開催試合数: 1,148 無観客試合: 0 有観客試合: 1,148	3,373 [無観客試合 86] [有観客試合 3,287]
		中止試合数 17 [うち延期し開催 16、未開催 1] [うちコロナ事由 11、荒天 6]	中止試合数 19 [うち延期し開催 19、未開催 0] [うちコロナ事由 17、荒天 2]	中止試合数 36 [うち延期し開催 36、未開催 0] [うちコロナ事由 24、荒天 12]	コロナ事由による 中止 52 うち延期なく未開催は 2020年の1試合
入場者数(人)	総入場者数 [19年 11,043,003人] ※カッコ内は2019年比	3,614,044 (33%)	5,034,064 (46%)	8,025,311 (73%)	
	J1 総入場者数 [19年 6,349,681人]	1,773,481	2,531,007	4,384,401	
	J1 平均入場者数 [19年: 20,751人]	5,796	6,661	14,328	
検査	実施件数 [自主検査除く]	44,613	68,225	239,976	
	手法	PCR検査	PCR検査	抗原定性検査	
	頻度	2週に1回	2週に1回 +オンサイト検査	週2回 +当日スクリーニング検査	
	費用	8.5億円	6.5億円	1.84億円(見込み)	

※J1・J2・J3リーグ戦、リーグカップ戦、スーパーカップ、J1参入プレーオフが含まれる ※トップチーム登録の選手・監督・スタッフ(J規約第47条①③該当者)

新型コロナウイルス感染症への対応総括 ー試合開催方針編ー

3シーズンの試合開催方針の変遷と2023シーズンに向けた見直し

コロナ禍の開催となった2020年から2022年の約3年間は、開催リスクに備えた様々なルールの見直しが行われた。

2020年

4カ月のリーグ戦の中断により開催期間が短縮した中、選手やチーム関係者に感染が拡大し特定のチームだけが試合未消化で終わったとしても大会が成立するよう、降格制度を一時的に廃止。交代人数を3名から5名へ増員するなどの特別なルールで開催された。

2021年

前年実施できなかった昇降格制度を再開し、J2・J3へそれぞれ4チームが降格する過酷な大会方式の中、J1ではこれまで試験運用していたビデオ・アシスタント・レフェリー（VAR）をリーグ戦にも本格導入。また依然として高い中止リスクを考慮し、試合が中止となった場合の取り扱い基準を細かく定め、さらに、もしもエントリー人数を満たせずに試合が中止となり、かつ代替日の設定が困難な場合、下限人数を満たさなかったチームを0-3の敗戦とする「みなし開催」の基準を取り入れるなど、競技の公平性を保つためのルールが整備された。

2022年

2021年の競技ルールを継続する一方、試合の規定を満たすスタジアムで行うルールや、国際カレンダーで定められたワールドカップなど代表戦が優先されるインターナショナルウィンドウ（IW）の期間はリーグ戦を開催しないという原則は、代替開催時にも適用するという内容に戻した。3年間を通じて国内最多の陽性者数となったオミクロン株の流行の影響で、Jリーグにおいても前年比で8倍近く陽性者が増える中、予定された1,148試合を開催できた。一方、エントリー下限人数である13名ぎりぎりでの試合が数試合行われ、実際に経験したチームの選手や指導者からは、フットボールの公平性や質の面で見直しを求める意見も出された。2023シーズンの試合の開催方針に関しては、コロナ禍で決めた方針やルールを見直す方向で協議し、エントリー下限人数と、中止となった試合の取り扱い基準を改定した。

	2020シーズン	2021シーズン	2022シーズン
全体方針	Jリーグ存続のために、大会成立が最重要 不公平を受け入れ、1試合でも多く開催する	試合開催基準の明確化 みなし開催の導入	「実現可能性」「公平性」観点から一部をアップデート
エントリー資格	公式検査で陰性（or エントリー資格認定委員会での承認） 体温37.5度未満 濃厚接触者の認定、入国制限地域からの入国などにより公的機関から自宅待機などの指示を受けている状態でない / 濃厚接触疑いに該当しない		
エントリー人数の基準	基準人数（GK1名含む14名）を下回っても、試合開催に向けて最大限努力する *「第2種トップ可」及び「特別指定選手」は、U23チームを除いて、カウントに含めない	選手13名以上（GK1名含む） *「第2種トップ可」及び「特別指定選手」はカウントに含める チームスタッフの下限人数はなし（=0人でも試合実施）	
チーム活動	自治体や保健所からの要請があった場合、チーム活動を停止する		
代替日設定	チェアマンが決定する	原則、1カ月以内（目安）	原則、45日以内 *IWがある場合のJ1リーグは60日以内
		J1リーグもIWに開催可能	J1リーグはIWには開催不可
		基準を満たさない会場でも開催する	原則、基準を満たすスタジアムに限る
		最終節を超えて設定しない *インテグリティ観点から問題ない場合は設定可能	
	原則、中止になった順番だが、総合的に考慮	両チームが中2日以上 原則、中止になった順番	
成立条件・みなし開催	延期開催が不可能な場合「未消化」 大会成立条件： 試合数の75%以上かつ全クラブが50%以上実施	延期開催が不可能な場合「みなし開催」 *一方のチームの責に帰すべき事由により中止となった場合：その帰責性あるチームが0対3で敗戦 *双方のチームの責に帰すべき事由により中止となった場合：双方のチームが0対3で敗戦	
その他	降格：なし	理念強化配分金：凍結	
	賞金：50%	賞金：100%（2019年と同額）	
試合中止	11試合（未消化：1試合）	12試合（みなし開催：0試合）	36試合（みなし開催：0試合）

フットボールビジョンの進捗（選手育成）

2022年の現在地とProject DNAによる将来の布石

育成の成果は、長きに渡り取り組んできた過去の様々な施策や実践からもたらされるものであり、さらに将来の成果を引き寄せるため、2022年の現在地を確認しながらJクラブアカデミーとProject DNAの取り組みによる2030年に向けた布石の成果を振り返った。クラブのシニアリーダー（実行委員や強化の責任者）やアカデミースタッフ・コーチ等の学びからもたらされる「発展の兆し」が得られた4年間となった。

2022年の現在地

2030フットボールビジョンとの距離を測るため、過去から取り組んできた様々な施策からもたらされたアウトカムを抽出した。現在地を把握し、2026年、2030年への発展の度合いを引き続きモニタリングしていく。



三笥 薫 選手（日本代表）
川崎フロンターレアカデミーから世界の舞台へ
大学を経てトップチームで活躍後、英・プレミアリーグ1部 ブライトンへ移籍



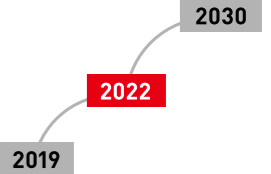
セレッソ大阪 北野 颯太選手
2022JリーグYBCルヴァンカップでは18歳でニューヒーロー賞を受賞

日本代表への貢献
<p>日本代表における Jクラブのアカデミー出身選手の割合</p> <p>57.7%</p> <p>U-18、U-15、U-12年代にJクラブのアカデミーに 3年以上所属したことがある選手数は、 2022FIFAワールドカップカタール大会日本代表26名中15名</p>
世界のトップリーグでの活躍
<p>欧州5大リーグへの移籍選手数</p> <p>2019-2022 計9人</p> <p>2019~2022年にJクラブから直接欧州5大リーグの 最上位ディビジョン（移籍当時）に完全移籍した選手数 （他リーグや5大リーグの下位ディビジョンを経由した移籍は除外）</p>

リーグ全体の状態
<p>J1・J2・J3 全クラブ ホームグロウン選手の保有割合</p> <p>2022 13.8%</p> <p>2019 13.0% 4年間で大きな変化はなかった</p>
国内トップリーグの状態
<p>J1 ホームグロウン選手の出場時間が 全選手の出場時間に占める割合</p> <p>2022 20.0%</p> <p>2019 18.9% 4年間で微増</p>



2019年のProject DNA開始時にU-15年代であった選手がIDP（個別育成プラン）などのツールやシステムに基づき成長しプロ契約するケースも出始めており、次のセカンドカーブでは具体的な成果を確認しながらよりプランの確度を高めていく



JクラブアカデミーとProject DNAによる変化の兆し

Jリーグは、日本型育成システムの構築を推進するため、2019年にProject DNAを立ち上げ、これまでに15億円の投資を行ってきた。その結果としての成果を検証する必要があるが、育成は直ぐに効果として現れるものではないため、将来に向けた布石をどれだけ打っているかを抽出して検証を実施した。



V・ファーレン長崎はアカデミー教育を通じてクラブの存在意義である長崎から平和を伝えることの重要性を伝えている

クラブのナレッジ蓄積
<p>JAQSへの参加および JAMPの利用率</p> <p>58クラブ中 100%</p> <p>JAQSの自己評価プロセスを通じ、世界水準の育成組織に必要な 23項目の基準を確認し、自クラブ発展の手がかりを得た JAQS：Jリーグアカデミークオリティスタンダード JAMP：Jリーグアカデミーマネジメントプラットフォーム (詳細は次ページ)</p>
クラブの変化の兆し
<p>JLiF^{※1}を受講したシニアリーダーによる回答 業務改善への貢献度^{※2}</p> <p>4.3pt (5点満点)</p> <p>※1 クラブの経営層（実行委員や強化の責任者）を対象とした研修 ※2 全4回の研修後、今後の自身の業務に役立つ内容かを アンケート調査。役立ちそうにない1pt、役立ちそうだと5ptで集計し 全4回の平均ポイント</p>

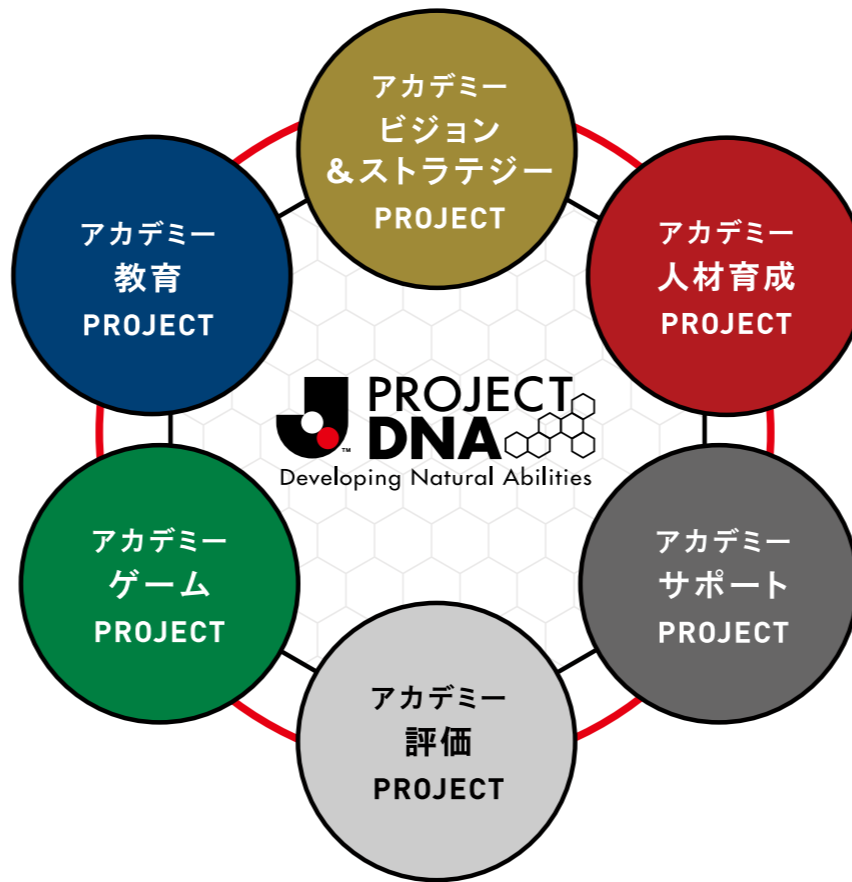
次世代リーダーの育成
<p>人材養成コースを修了した アカデミー人材の分布割合</p> <p>1クラブあたり 1.8人</p> <p>日本型の育成システムに 必要なアカデミー人材養成コースを立ち上げ、 世界水準の学びを行った</p>
エリート選手の教育
<p>リニューアルした 新人研修^{※1}の受講者^{※2}</p> <p>2年で 437人 新加入選手の100%^{※3}</p> <p>※1 2021年からシーズン前の集合型研修を完全にオンライン化し 通年利用できる講座を提供 ※2 2021-2022年における受講者数の合計 ※3 プロ契約初年度の新人選手（日本人）</p>

フットボールビジョンの進捗（選手育成）／ Project DNA

セカンドカーブに向けた4年間の振り返り - 成功のための基礎固めと環境づくり -

2019年2月に立ち上げたProject DNAは今年で4年目を迎え、各プロジェクトごとの第1サイクルを振り返る。世界水準のアカデミーシステムとホームグロウン選手が育つための最適な環境を整えるため、JAQSを中心とした各アカデミー発展のプロセスを、6プロジェクトの有機的な連携により運用し、各プロジェクトの目標を達成させることに注力した。

6つのコアプロジェクト



「日本サッカー界の次世代のリーダーを育てる」ことを目標に、クラブのフットボールフィロソフィーに沿ったクラブ内の黄金の一貫性を構築できる人材育成プログラムを提供

35名のゲストスピーカーのうち
29名が欧州5大リーグのプロフェッショナル
※イングランドFA所属スタッフ2名、プレミアリーグスタッフ3名を含む



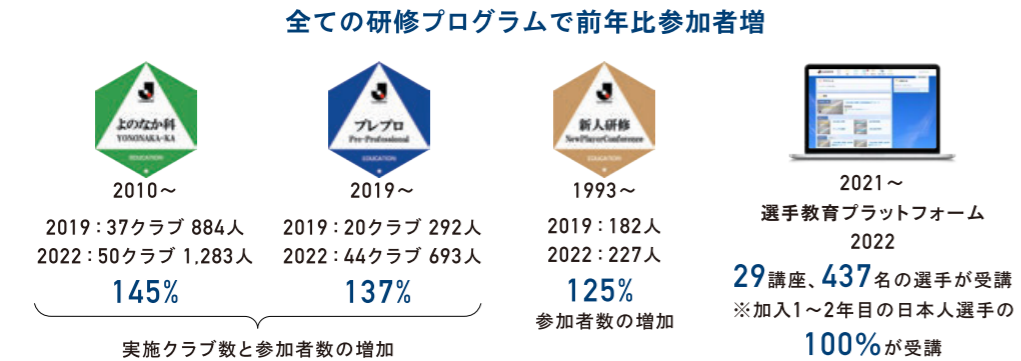
注)
JHoC: Jリーグ ヘッドオブコーチング養成コース
JAM: Jリーグ アカデミーマネージメント人材養成コース
JHoE: Jリーグ ヘッドオブエデュケーション養成コース
JAC: Jリーグ アカデミーコーチワークショップ
JCD: Jリーグ コーチディベロッパーワークショップ

- 2名のアカデミーサポートマネージャー（ASM）の専任化により、リーグとクラブスタッフ間の双方向コミュニケーション機会が増加し、より効果的で即時的なフィードバックプロセスが構築された
- JAQSの評価後のアクションプランに応じたクラブへの質の高い個別サポートを実施
- クラブ訪問による対面でのコンタクトに加え、Zoomによる日常的なコンタクトタイムが増加

2030年までに「世界をリードするJリーグのアカデミーシステム」の実現に向けた取り組みを推進。Jリーグの戦略を現在の環境や世界のフットボールの要求に合わせて進化させるため、JLiF（Jリーグ リーダーズインフットボール）を通じて各クラブのシニアリーダー（実行委員及び強化の責任者など）に更なる学びの機会を提供し連携を深めてきた



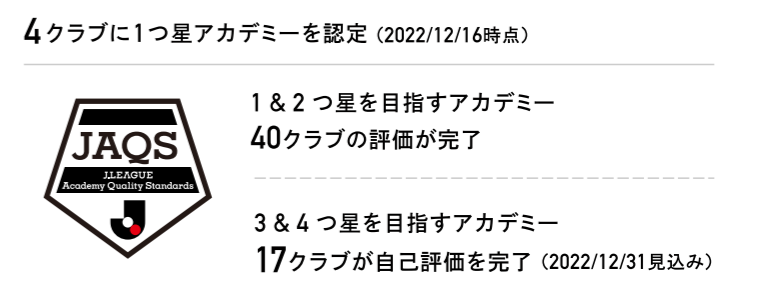
「育成はオン・ザ・ピッチとオフ・ザ・ピッチの両方で実現する」として、ライフスキル向上と学びのプログラムを提供し、サッカー選手としてのキャリアや人としての成長を主体的に（オーナーシップを持ち）管理できるよう働きかけてきた



エリート選手に「ストレッチと統合（上のカテゴリーの試合での学びを元のカテゴリーで定着）」の機会のためのゲームプログラムを提供。4年間を通じ、特に2020年以降はコロナ禍の影響もあり、理想的な試合間隔での開催が困難であったが、ゲーム環境の整備だけでなく、登録制度やスカッド管理など、選手のパスウェイの構築に関連する制度上の抜本的な見直しが必要との振り返りを行っている。

- U-18、U-15などの年代別カテゴリー間をシームレス化するため、Jエリートリーグ（U-21中心）とJユースリーグ（U-17）を新設
 - 育成年代のカレンダー改革を見越し、Jユースの大会方式を変更
- Jリーグ主催試合
2019-2022 2,143 試合

- 「測定できることは改善することができる」として、世界水準を見据えつつ、日本のサッカー環境に合った評価基準であるJAQS（Jリーグアカデミークオリティスタンダード）を構築してきた。
- JAQSのプロセスを通じ、多くのアカデミーのパフォーマンス向上にサポートが必要な領域を特定し、適切な情報を効果的なタイミングで提供してきた。



今後のフットボール改革の実行に向けて

フットボール委員会を新設

成長テーマの一つに掲げる「トップ層がナショナル(グローバル)コンテンツとして輝く」ために、Jリーグは今後、フットボール改革に取り組み、競争と成長を促すことで競技水準の向上を実現していく。フットボールに関わる多岐に及ぶ検討課題を確実に推進するため、Jリーグは今年9月にフットボール委員会を新設。世界水準に照らした課題の分析や、現在運用している制度やフットボール環境をどのように見直すべきかの検討を始めている。

▶ フットボール委員会

Jリーグ規約および専門委員会規程に基づき、9月27日に新設。新たな成長戦略の実現に向けて、フットボールに関するより質の高い議論とスピーディーな意思決定を実現するために設置された。

所管事項

フットボール委員会の役割

- ① フットボール戦略に関する事項の検討・立案
- ② 強化・育成に関する事項の検討・立案
- ③ 試合日程・リーグ構造・大会方式に関する事項の検討・立案
- ④ フットボールの魅力向上に関する事項の検討・立案
- ⑤ その他フットボールに関する各種制度等の検討・立案

委員 (2022年12月18日時点)

窪田 慎二 (委員長)	Jリーグ理事
反町 康治	Jリーグ理事/JFA理事 技術委員会 委員長
宮本 恒靖	Jリーグ理事/JFA理事 国際委員会 委員長
立石 敬之	Jリーグ理事/シント＝トロイデン CEO
大倉 智	Jリーグ理事/株式会社いわきスポーツクラブ 代表取締役社長
森島 寛晃	Jリーグ理事/株式会社セレッソ大阪 代表取締役社長
内田 篤人	Jリーグ特任理事/JFAロールモデルコーチ /シャルケ04チームアンバサダー
中村 憲剛	Jリーグ特任理事/Frontale Relations Organizer /JFA ロールモデルコーチ/JFA Growth Strategist
三上 大勝	株式会社コンサドーレ代表取締役GM
鈴木 満	株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー 強化アドバイザー
足立 修	株式会社サンフレッチェ広島 強化部長
西村 卓朗	株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック 取締役ゼネラルマネージャー
小林 伸二	株式会社ギラヴァンツ北九州 スポーツダイレクター

フットボール委員会で認識している主な課題

今後、世界水準のフットボールの競争環境に適応しながら、リーグ全体の競技水準の向上を目指し、フットボールマネジメント上のROI(投資対効果)をいかに高めるかに重点をおいた議論を始めている。クラブや選手が、契約、トレーニング、試合、移籍、選手育成などの関わる全ての活動で価値を高め、さらなる成長につながる好循環を生み出せるよう、現行の契約や登録制度、試合環境などのあらゆる制度や環境が、Jリーグを取り巻く国内外のフットボール環境の変化に適応した設計となっているかを改めて調査し議論を進めている。各種制度や環境は相互に影響しあうため、フットボール委員会で全体を俯瞰しながら、最適なバランスとなるよう検討されている。

関連する制度や環境の一例

■ スカッド管理

チームと選手双方のパフォーマンスが最大化し、適正な出場時間を与えられるスカッド(メンバー構成)と、それらを実現するための関連する制度やルール(外国籍枠、ホームグロウン制度、年齢構成等)のあり方とは

■ 選手契約

選手・クラブ双方にとって最良の契約関係が実現するための現在の制度上の阻害要因とは

■ 海外リーグ分析

刻々と変化する海外リーグの状況をキャッチアップし、世界水準と比較してJリーグの各種制度や環境が常に最適な内容となっているか

■ 選手育成

試合環境

ポストユース年代の選手が強度の高いトップレベルの試合に多くの時間出場するためにどのような試合環境が必要か

指導環境

フットボールマネジメントに成熟したプロフェッショナルを輩出し続け、選手にとって質の高い成長環境が常に提供され続けるためには

■ 移籍

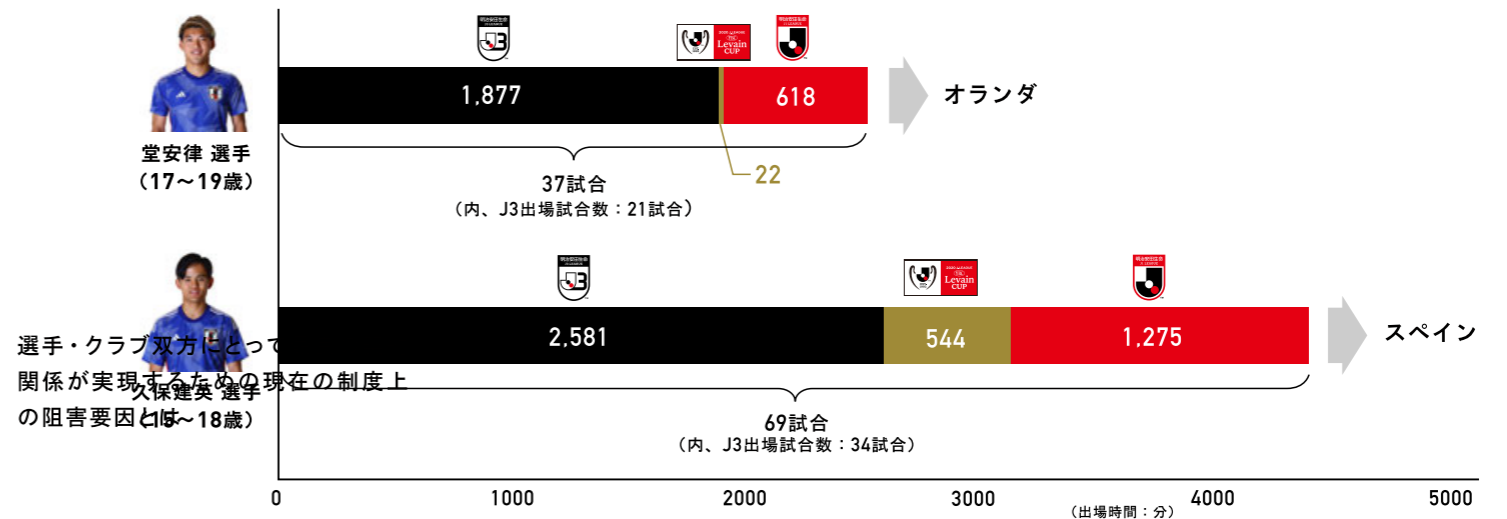
グローバルな移籍市場においても、選手・クラブ双方にとって最適なタイミングと適正な市場価値で移籍が実現し、選手のさらなる成長やクラブ・リーグの発展につながる制度のあり方とは

若手の出場機会の確保 - 堂安選手・久保選手の事例

11月から12月にかけてFIFAワールドカップカタール大会が開催され、日本はドイツとスペインに勝利しグループステージを突破した。惜しくもベスト8の進出は果たせなかったが、要所で役割を果たした堂安律選手と久保建英選手など若手選手の活躍ぶりに、次世代の活躍が期待される中幕を閉じた。

24歳と21歳と若いながらも躍動した両選手には共通項がある。早い時期にプロ選手としてキャリアをスタートし、10代のうちからインテンシティの高い試合を2,000時間以上経験している点である。注目すべきは、両選手ともに、海外クラブに移籍する前の10代のキャリアにおいて、J3リーグでの出場時間が堂安選手は1500分、久保選手は2500分を超え、J1のリーグカップ戦やリーグ戦など、トップカテゴリーでも出場時間を延ばしている。

両選手とも、これらの出場機会は、Jリーグが2014年に明治安田生命J3リーグを設立する際に、J3クラブとともに、Jクラブに所属する21歳以下の若手選手を選抜してJ3へ出場させる「JリーグU-22選抜」や、その後、FC東京、ガンバ大阪、セレッソ大阪などのJ1クラブが、トップチームとは別にU-23チームを組成しJ3に参戦した際に、自らつかみとったものである(2022年現在では終了)。両選手のように、世界に通用する才能豊かな若手選手を次々と輩出するリーグとなるために、ポストユース年代の選手を含むそれぞれの年代で必要とするストレッチと統合の経験が十分に提供される環境の整備に、日本サッカー全体の課題として継続的に取り組んでいく。



誰もが安心してチャレンジできる社会をJリーグから



Jリーグが推進するセーフガーディング

Jリーグは、全ての人々が安全で安心して楽しくサッカーに関わることが大切であるとの考えのもと、セーフガーディングを推進している。2030フットボールビジョン「世界で最も人が育つリーグ」の実現にあたって、セーフガーディングの推進は最も基本的な要件として位置付けている。Project DNAにおいても、6プロジェクト全体に関連する非常に重要な要素として、スタッフ、選手、保護者は自分たちの活動の全てが安全に行われること、つまりセーフガーディングの大切さを学ぶ。Jリーグは、

日本サッカー協会（JFA）、Jクラブと共に、サッカーに関する全てのプログラムや、活動に関わる全ての子ども、若者、大人のセーフガーディングを促進する文化を確立するために取り組む責任と必要があると考えており、アカデミー評価制度（JAQS®）においてJクラブアカデミーが備えるべき基準として「セーフガーディング」の項目を最初に位置付け、全てのJクラブで推進している。

▶ セーフガーディングを浸透させる仕組み

1 セーフガーディングガイドラインの発行

各クラブが適切な基準を保つためのガイドラインを提供

本ガイドラインは、FIFAが定める FIFA GUARDIANS（FIFA ガーディアンズ）をJFAが監訳した日本語版を底本とし、Jリーグセーフガーディングワーキンググループが試行版として作成。特に、JFA リスペクト・フェアプレー委員会からのアドバイスをもとに、JFA サッカーファミリー安全保護宣言の趣旨とJFA チャイルドプロテクションポリシーの趣旨を反映させている。

主な内容

- FIFA によるサッカーにおける子どもたちの安全保護の5つの原則
- JFAサッカーファミリー安全保護宣言
- サッカー活動における子どもの見守りに関するガイドライン
- サッカーの試合と練習に関するセーフガーディングガイドライン
- 施設の利用に関するガイドライン
- 大会への遠征の計画と実施に関するガイドライン
- サッカー活動における移動に関するガイドライン
- サッカー活動に関する情報発信のガイドライン
～ソーシャルメディアによる選手の画像と通信の利用など
- 選手（子どもあるいは子どもたち）の行方が分からなくなった場合
～行方不明者ポリシー



2 アカデミー評価制度における基準に設定

Jリーグアカデミー評価基準（JAQS®）の一例
セーフガーディング 評価基準（1つ星から4つ星まで共通）

※基準の一部を抜粋して簡略化

担当責任者を配置	窓口／報告経路
セーフガーディングの担当責任者が任命（そして特定）されており、アカデミー・マネジメントチームへの報告義務を担っている	個人情報を脅かされることなく報告相談を行うことのできる窓口／報告経路を明確に定めている
リーグのワークショップへの参加	関連手順／手続き／窓口の表記掲載
担当者は年1回のワークショップに出席し、この分野の模範例に関する知識を常にアップデートしている	クラブ／アカデミーの施設及び寮内のいたるところで容易に目に付く場所に設置されている
説明会の実施	クラブのポリシー／ルール
セーフガーディングに関する説明資料を、アカデミー在籍の全スタッフ、全選手、保護者らに毎シーズン提供	アカデミーの各活動において所定事項を含むポリシー／ルールを定めている
スタッフ、選手、保護者らの行動規範	採用スタッフ方針
それぞれがそれぞれの行動規範を把握し、内容に同意し、署名している。行動規範は各自に共有されており、必要な際すぐに手に取って内容の確認ができる	スタッフの採用に関して安全性が考慮されたルール／方針がある

3 ワークショップの定期開催とクラブ独自のポリシー作成

セーフガーディング担当者を対象にベストプラクティスや最新情報を共有するためのワークショップを年に1回開催。全58クラブはセーフガーディングポリシーの作成を進めており、環境に応じたセーフガーディングポリシーがクラブを通じて発信されることで、所属選手や保護者、コーチングスタッフ、クラブスタッフなどの関係者のみならず、地域のサッカー普及に携わる多くの関係者に向けて、セーフガーディングの考え方や取り組みを広める役割が期待されている。

2020～

239人

Jリーグのセーフガーディングワークショップに参加
※JFAや外部の専門家との協力も実施

全58クラブ

セーフガーディングポリシーを持っている、または作成に向けたアクションを実施している



ワークショップでは、セーブ・ザ・チルドレン（2020年）、JFAリスペクト・フェアプレー委員会（2021年）、そして（一社）アンガーマネジメント協会（2022年）の協力のもと、ゲストスピーカーをお招きし、セーフガーディングの学びを深めている。



2023年1月にJリーグ公式ホームページにてセーフガーディングのサイトがオープン
JリーグセーフガーディングポリシーやJリーグやJクラブの取り組みなどを紹介

